

論文の内容の要旨

論文題目 語録の思想史 ―中國禪宗文獻の研究―

氏 名 小 川 隆

禪は一般に、坐禪によって悟りをめざす宗教だとされている。しかし、坐禪・禪定という行の實踐は、特に禪宗に限られたものではなく、さらには佛教に独自のものでさえない。文獻としてのこされているものを見るかぎり、禪宗のきわだった特徴は、坐禪よりも、むしろ禪僧どうしの問答にこそあったと思われる。

むろん、問答の前提に、坐禪と作務^{きむ}からなる修行生活があったであろうことを否定する必要はない。現時点で自らの開悟を目指すのなら、今日でもやはり、自らその道を行くべきであろう。だが、かつて歴史上に存在した禪宗思想について考えようとするならば、我々に與えられた道は、書物としてのこされたものを虚心に読み解くことの外にはない。そして、書物のなかで見るかぎり、禪僧の修行はそれのみでは完結せず、多くは問答を契機として道を得ることで、はじめてその最終的な達成を見るのである。したがって、歴史上の禪を學問的に研究しようとするならば、禪の語録のうちに集積された問答群の解讀によって、禪というものがそれぞれの時代に、如何に捉えられ表現されてきたかを考えるという作業を、必ず基礎とせねばならぬのである。

本研究は、まさにそうした基礎的作業を試みたものに外ならない。禪は論理と時空を超越したものだとして、しばしば説かれる。だが、少なくとも語録に記された問答には、言葉としての意味と脈絡があり、時代ごとの思惟と表現の差異がみとめられる。本研究は禪宗の最盛期である中國の唐・宋代の代表的文獻から、それぞれの時代の禪宗の思惟と表現を讀

み取り、それが二〇世紀にどのような形で理解・再編されて今日の禪言説に連なっているかを考えようとするものである。それは厳密に言えば、禪そのものの歴史というよりも、禪者の「言葉」を傳承し編集し解釋した人々の集團的思惟の歴史というべきものであり、本研究を「禪の思想史」でなく、敢えて「語録の思想史」と題した理由がここにある。論文は次の四つの章から構成されるが、いずれの場合も、各文獻の語句と文脈に密着してその思惟と情緒を追跡することを趣旨とし、形而上學的思辨による抽象的論述とは一線を畫することを身上とする。

(1) 序論 庭前の栢樹子^{ほくじゆし} ——いま、禪の語録をどう讀むか——

「庭前の栢樹子」と稱される有名な禪問答を題材として、禪語録の解讀の方法について論ずる。同じ禪問答でも、唐代と宋代では思惟と表現が大きく異なる。唐代の禪問答は、禪宗内で共有されていた問題意識のもとで問答どうしが関連しあっており、その脈絡を復原しながら讀み解くことで、一見意味不明な禪問答も、實は有意味なものとして理解される。しかし、宋代にいたると、同じ問答が個別の斷片として扱われ、不可解ゆえに意味や論理を超越しうるものとされるようになる。この種の考えは、二〇世紀における禪言説の原型ともなっている。

(2) 第一章 『祖堂集』と唐代の禪

中國禪宗の原初の息吹きを最もよく伝えと評される五代の禪宗史書『祖堂集』を主な材料として、唐代禪宗の思想について考察する。

第一節「馬祖系の禪」は、唐代禪宗の主流となった馬祖道一^{ばそどういつ}とその門流の禪について論ずる。馬祖の禪は一言でいえば「即心是佛」、すなわちありのままの自己の心こそが佛だとするものである。その考えは、身心の平常の營みをそのまま佛作佛行^{ぶつ きぶつぎょう}とみなす「作用即性」説や、外なる聖性への追求を一切やめ、ありのままの状態に自足することを理想とする「平常無事^{びやうじようぶじ}」の説などとして表現される。ただし、こうしたありかたには、馬祖の弟子たちの間から懷疑や批判も提出されるようになり、自己の現實態に對する即自的是認と超越的克服という、その後の禪宗思想史を構成する二本の對立軸が示される。

第二節「石頭系の禪」では、馬祖禪から分立し、唐代禪宗の第二の主流を形成する石頭希遷^{せきとうきせん}の系統について考える。馬祖禪が自己の本來性と現實態の無媒介の等置を趣旨とするものだとすれば、石頭系の禪は、その兩者を玄妙な不即不離、不一不二の關係ととらえようとするものである。「本來人^{ほんらいにん}」「主人公^{しゅじんこう}」——すなわち現實態の自己を離れず、しかし、それでいて、それとは次元を異にする本來性の自己——その探求がこの系統の顯著な特色となっている。

(3) 第二章 『碧巖錄』と宋代の禪

禪の思想と氣風は、北宋期において大きく變わる。それはひとことでは、ありのままの自己肯定を基調とする唐代の禪から、超越的な大悟の體驗を志向する宋代的な禪への

轉換とってよい。むしろ、それは一朝一夕の變化でなく、北宋期を通じての種々の演變の結果であり、ここではその過程を、宋代の最も代表的な禪籍のひとつ『碧巖録』のなかから読み取ることが試みる。

まず、第一節「禪者の後悔——『碧巖録』第九十八則をめぐって——」で、唐代の問答が宋代禪籍において大きく趣旨を読み變えられていった實例を紹介し、つづいて第二節「〈ひやくじょうやおうす百丈野鴨子〉の話と作用即性説批判」では、『碧巖録』が馬祖禪ふうの「作用即性」説を批判していること、第三節「〈じょうしゅうしちきんふざん趙州七斤布衫〉の話と無事禪批判」および第四節「圓悟における無事禪批判と無事の理念」では、同書が「無事」への安住を激しく批判しつつ、劇的な大悟の體驗を要求していることを論證する。ただし、『碧巖録』も、究極的には「無事」への歸着を理想としており、そのために「無事」(0度)→「大悟」(一八〇度)→「無事」(三六〇度)という圓環の論理が提示されている。この論理は、北宋期の禪門の巨視的動向を総括する意味をもっており、二〇世紀の禪言説でもしばしば踏襲されるものである。

最後に第五節「『碧巖録』におけるかつく活句の説」で、宋代禪の「活句」について考える。本來有意味であったはずの唐代の禪問答も、宋代の禪門ではひとしなみに、沒意味的・脱論理的な「活句」として扱われるようになり、『碧巖録』はそうした「活句」の參究を、「無事」を打破し「大悟」をもたらす重要な契機と位置づける。その説がやがて方法化されて大たい慧宗杲の「看話」禪となり、その後の禪のありかたを決定づけることになるのであった。

(4) 第三章 こてき だいせつ 胡適と大拙 ——二〇世紀の禪——

禪が宗門の枠を超え、ひろく學術界・思想界一般の關心事に加わるのは二〇世紀になったのことであり、中國禪宗文獻に対する今日の理解は、二〇世紀に再構成された禪言説に大きく規定されている。それを對象化して再検討することなしに、過去の禪籍に虚心に向き合うことは難しい。そこで、ここでは、そうした二〇世紀的禪言説の形成に最も大きな影響のあった、胡適と鈴木大拙の二人について考える。結論からいえば、二〇世紀的禪言説とは、上記のような宋代的禪を西洋近代的思考と組み合わせようとしたものであったと看することができる。

今日、禪を學問的に扱おうとする場合、嚴密な文獻批判と史實の考證によって客觀的・實證的な論述を行うことが常識となっている。第一節「胡適の禪宗史研究」では、胡適が清朝考證學の手法とプラグマティズムの思考を武器としながらそうした研究方法を確立していった状況を検證し、それと同時に、胡適の禪理解が、思想的内實を輕視し、禪を開悟の方法論としてのみ捉えるという偏向を含んでいたことを解明する。その原因は、内容の差異よりも方法の差異として思想を評價しようとする胡適流プラグマティズムの思考と、大慧流の「看話」禪を禪理解の無意識の前提としていた當時の通念に求められる。

一九五〇年代に胡適と大拙の間でかわされた論争は、禪宗研究至上の有名な話題として語り継がれている。その争点は往々、胡適の合理主義・歴史主義と大拙の直觀主義・體驗主義という對立圖式で捉えられがちだが、實はその奥に、如何に西洋近代に對應するかと

いう共通の課題があったことが見落とされてはならない。ここでは第一節後半でその問題にふれた後、さらに第二節「鈴木大拙の〈禪思想〉」で大拙の思想について考察する。大拙はしばしば西洋近代の限界を指摘し、それをのりこえるものとして「禪思想」を説いている。しかし、「般若即非」「無分別むぶんべつの分別ぶんべつ」「真空妙用しんくうみょうゆう」など、多彩な造語を駆使して書かれたその所説は、實は宋代禪ふうの圓環の論理を用いながら禪と近代文明の連動を企圖するものだったのであり、そこには、戦争という名の歪曲された近代とも、そのまま連動してしまう危うさが潜んでいたのであった。

以上が本論文の梗概であるが、しばしば指摘されるように、敦煌出土の初期禪宗文獻と馬祖禪以後の傳世資料との間には、決定的な質的斷絶がある。本論文が論じたのは、もっぱら馬祖以後の、いわば禪宗が禪宗として確立された後の時代の文獻であり、異なった分析方法を必要とするそれ以前の禪宗については扱っていない。それについては、すでに『じん神會—敦煌文獻と初期の禪宗史』(臨川書店、唐代の禪僧二、二〇〇七年)で獨立に詳論してあるので、それを参考論文として本論文とともに提出する。そこでは最初期の禪宗の登場から馬祖禪の成立までの過程が述べてあり、時代的に本論文に直接連続する内容となっている。